

良いが、「孤独や孤立をなくし、地域で協力して『豊かなくらし』を実現したい」のように、自分たちなりの考えがまとまってから対話した方が良かったと感じられた素材は、ちょうど中間地点当たりのタイミングが良いという感想が多かった。

「考える素材」を提供いただいた事業者とのふりかえりの中では生徒の発想に面白みを感じたという感想や、問題意識を知ることができて良かったという感想を多く頂いた。また自分のチーム内で考えるだけでなく、クラスメイトや地域の人へのヒアリングなどの調査を行い、それらを整理して報告で来ていた点をほめていただいた事業者も複数あった。改善点の指摘としては「途中で意見交換する機会を作った方がいい」というものがあった。中間地点でディスカッションできると、アウトプットが大きく変わるという指摘は、教員側の中間報告の必要性の指摘と合わせ、スケジュールの改善の可能性を示唆している。

ここからは取組など、「京都探究」の構成要素単位で、成果と課題に触れる。

「考える素材」については、事業者が持つ「将来に向けて、こういうことを考えていきたい」といった長期かつ広角の視野で、漠然と考えるべき枠組みをもらい、京都を中心とする地域や社会について考える部分に特長が現れる。「考える素材」により、想定する地域や社会の範囲や大きさはさまざまであった。京都信用金庫の「地域に合ったコミュニティを作りたい」や南区役所の「みなみ力(地域力)を活性化したい」のように学校周辺がイメージされる素材については、フィールドワークや関係者へのインタビューなどから課題を発見し、解決策の発想を広げ、具現化するための策を考えるという探究プロセスが多くみられた。そのため、地域や社会として想定されたものは開建高校周辺や南区という範囲であった。

一方、ウエダ本社の「日本人の仕事観、働き方を変えたい」や京セラの「『誰かのため』になることをしたい」では、マスメディアがとりあげるような社会問題から入った生徒も多く、その場合にもとすれば日本社会が対象となってしまうところを、身近な問題に落とし込み、生徒が考えられる課題のサイズにするために、開建高校内では、周辺地域ではどうかという形で地域や社会が設定される形が見られた。このように考える部分、つまり探究プロセスの部分を、地域や社会を使って分化させ、多様なアプローチが可能になったと考えられる。したがって、今年度の「考える素材」の設定については、何かの要素において大きな偏りがあり、活動が阻害されるということはなく、成功したといえる。ただし、教員のふりかえりにあるように、生徒の取り組みやすさに差があったこと、「考える素材」一つあたりの生徒人数が多くなってしまったことに改善の余地があると考えている。

「生徒の責任ある計画の立案・実行に任せ」るために行った「『師』を訪ねる」などの取組においては、教員のふりかえりにもみられたように、よりプロセスを簡略化し、生徒がより多く調査に行ける環境を作ることが求められる。そのためには授業担当教員の声として、「担当者への事前ミーティングと担当者への責任の移譲が必要」といった声のほか、「ミーティングの時間を時間割内に設定するなどの工夫が必要」などの具体的な解決策を提示しているものもあった。したがって、生徒らの調査機会を増やすためには、各素材の担当教員の裁量の余地を高め、より柔

軟に、生徒のモチベーションが高まっているうちに必要な指導を行い、調査を実行できるような体制を確立することが求められる。そのためには、担当者会議の時間を設定する必要など解決策を考える必要があるが、そのためには、時間割の中で担当者の打ち合わせの時間を作ることが求められる。

『師』を訪ねる」の取組のほか、フィールドワークなどの探究活動を通して、探究に使える手段の種類を増やすことができ、机の上で考えるだけでなく、自分たちで一次情報を集めるという姿勢を作れたことは成果である。

Kaiken Implication では、対話の中で実現に向けた構想が練り上げられる場面などがあり、高校生がアクションを起こせば、事業者のサポートがあり、場を提供してくれたりする可能性が生徒の中に漠然と理解されている段階から、目の前に機会が見えている段階に到達できたことに意義があった。これが発表、質疑応答の場ではなく、対話の場であり、京都探究での活動がそこで完結するものではなく、その後も連続的に続いていくものであるとの理解とつながれば、生徒の活動機会が広がり、探究対象の選択肢が具体的にいくつも選択肢として存在している、「やってみたいをやってみる」という本校のキャッチフレーズを具現化した状態になる。これは1年生の終わりの時点の姿としては理想的であり、今年度の取組の計画と実施について、初年度としてはひとまず成功したと考えている。ただ、今後2年生の取組との接続ができていたか、今年度確認したとこちらが考えていた姿が生徒の実態として存在していたとできるものなのかといった点について検証し、来年度の取組につなげていく必要がある。

○今後の方向性

「考える素材」については、今年度のものを継承しつつ、事業者の意向によっては、文言の変更や入れ替えも検討する。また素材数についても、一つの素材当たりの生徒人数を減らすために、増やすことが望ましいと考えている。

「考える素材」の発表については、今年度はビデオメッセージと来校してのプレゼンテーションを組み合わせる形で行ったが、これは「考える素材」の完成や事業者への案内が9月に入ってからになった結果と考えられる。生徒の熱量を高めるためにも、多くの事業者に来校いただき、「考える素材」の発表会を盛り上げる必要不可欠であるため、来年度は、早期に案内を行い、より多くの事業者に来校いただけるようにする。

フィールドワークの成果として、成果として、生徒が困ったときに、とりあえず情報がありそうな場所に行ってみて、観察してくるという行動が良く見られるようになり、探索の手段として、定着した様子が確認された。ただ、実施のタイミングについては、「考える素材」の決定前よりも、決定後の方が、観察の視点を定めやすく、より効果的なフィールドワークになると思われ、来年度のスケジュールにおいて改善を試みる。

また取組の途中で「考える素材」を提供していただいた事業者と対話する機会があることは、生徒の成果物を洗練させる効果があるだけでなく、事業者が高校生の探究活動についての知見を得られるというメリットがあることがわかった。そこで来年度は探究活動の期間の途中で一度対話の場を設けるという条件を設定したいと考えている。ただ、前述の通り、「考える素材」ごとに対話を必要とするタイミングが異なっている。必要なタイミングをどの時点で見極め、その時期に事業者のスケジュールの都合をつけることは可能であるのかという点については、来年度、この機

会を新たに設計するにあたり、慎重に検討すべき点として留意しておく必要がある。

3.3. 未来デザインプログラム

○本プログラムの背景・目的・概要

本プログラムは、「学校設定科目」である「ルミノバージョンⅠ」(2単位:木曜6・7限)で行われる取組である。高校生は、教師・消防士・銀行員など「名前のついた職業」を参照することで、働く人のイメージを作りだす傾向にある。この枠組みを超えるための原体験として本プログラムは位置付けられている。いわゆるキャリア教育の一環で行われる「企業訪問」や「職場体験」に類するものであるが、訪問や体験にとどまらず、「働く大人のリアルな語り」に触れることで、働くことについての考えをアップデートし、自分の未来をデザインする第一歩とする点に主たる狙いがある。

○本年度の実施概要とスケジュール

表 28 本年度の実施概要とスケジュール

令和5年度	
1. 実施時期	8月～9月
2. 訪問日	9月14日 午後 ルミノバージョンⅠ授業内
3. 対象生徒	開建高校 ルミノバージョン科 240名
4. 引率	第1学年担任団 12名が付き添い (1名学校待機)
5. 訪問先選択	一部希望を聞きながらランダムに配置

8月17日(木)	訪問先発表 訪問先について調べ学習開始
8月24日(木)	講演とワークショップ 6限 京都市のコース・アントレプレナーシップ事業を活用し、講演とワークショップ。社会で活躍する人のものの見方、考え方、捉え方を知り、ただお金を稼ぐ、生活のための仕事ではなく、やりがいや社会貢献性、自分の価値観等から、社会、仕事を見るきっかけとする。 7限 ワークショップ
9月7日(木)	文化祭につき授業なし
8月31日(木)	事前学習 ワークシート①(後述) 6限 訪問に向けて、グループ内自己紹介 7限 訪問先について調べた内容をグループ内共有(企業概要、理念、その他情報) 訪問グループで何を聞いてみたいか、知りたいか、具体的にイメージし、整理する。
9月14日(木)	訪問 事前学習 ワークシート②(後述) 5限 教室待機→随時出発 6限 訪問 7限 訪問

9月 21 日(木)	事後学習 事前学習 ワークシート③(後述)
6限	訪問グループで訪問のふりかえり ワークシート記入
7限	お礼状作成

○本年度の実施体制

「高等学校コンソーシアム京都」「京都中小企業家同友会」「京都市わかもの就職支援センター」に業務支援をいただき、訪問先への受け入れ交渉・調整等を行っていただいた。これらと学校を接続する窓口として、本校のコ・クリエイトセンター担当2名(内1名は地域協働コーディネーター)を設置した。

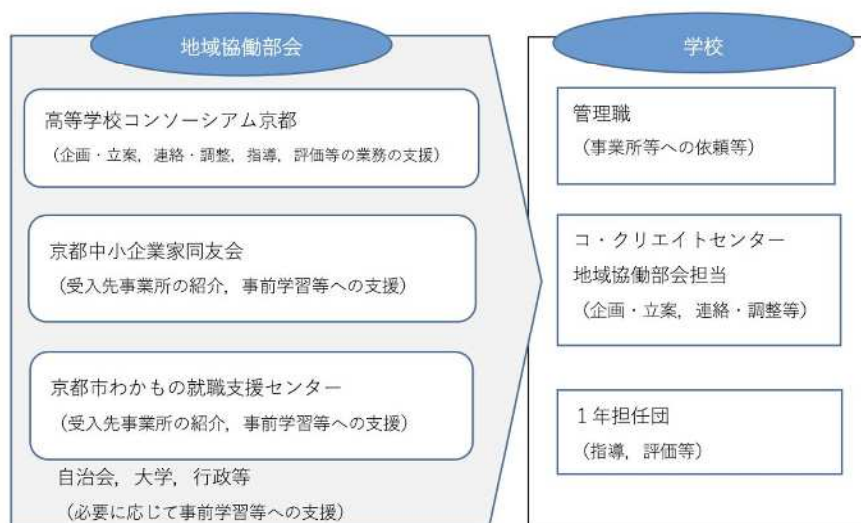


図 29 本年度の実施体制

学校内部の実施体制は企画・運営をコ・クリエイトセンター担当2名、実務を1年担任団 13 名とした。コ・クリエイトセンター担当2名が地域協働部会、訪問先との交渉・調整を行い、実施に向けたロードマップの共有や授業の運営などを第1学年の担任会で説明するというプロセスで運営を行なった。

訪問当日は、コ・クリエイトセンター担当2名＋第1学年から教員1名が全体の運営として学校に待機し、トラブル対応等に備えた。第1学年の残り 12 名については、新規の受け入れ先やアクセスが難しい場所を中心に付き添い教員として現地へ訪問した。

○起業家講演

未来デザインプログラムの企業訪問の事前学習として、起業家の方による講演会を行った。この講演会は、京都市と京都高度技術研究所(ASTEM)とが連携した「ユース・アントレプレナーシップ事業」を利用して実施したものである。今年度の開建高校では、若手経営者による講演会と、ワークショップを同一日に実施した。

未来デザインプログラムは、その取組の中で生徒が「リアルな語り」を得て、自分のもっている「働く大人」「仕事」の枠組みを超えて、自分の未来をデザインする第一歩とするように設計されたプログラムである。その取り組みの始まりとして、社会と関わるあり方として「起業」を選んだ方の講演を聞き、それに基づき視野を広げるワークショップを経験

することで、卒業後の遠い未来に自分がこの社会とどのように関わるかを考え、これまでの職業観・大人観を転換する機会とした。

本校運営指導委員である仲田匡志様と、株式会社「食一」代表取締役の田中淳土様をお招きし、ワークショップと講演会を行った。まずワークショップでは仲田氏より『人生 100 年時代の「インポッシブル」を探せ』と題したワークショップを実施していただいた。後半の講演会では田中氏から事業内容や企業に至った経緯等をお話しいただいた。

○企業訪問受け入れ先団体一覧

これまでに連携していただいている団体・高校新規開拓企業(表3[開])に加えて、「京都市南区中小企業家同友会」(表3[中])、「高等学校コンソーシアム京都」(表3[コ])「京都市わかもの就職支援センター」(表3[わ])の協力を経て、37 の受け入れ先に協力をいただいた。

表 30 令和5年度受け入れ先一覧

(1～8:教育機関、9～34:企業、35～37:行政機関、五十音順)

No.	名称	人数	紹介	No.	名称	人数	紹介
1	学校法人 くるみ幼稚園	5	わ	21	株式会社堀場製作所	5	コ
2	京都芸術大学	10	開	22	株式会社マコトプラスチック	5	中
3	京都光華女子大学	10	開	23	株式会社リーフ・パブリケーションズ	5	わ
4	京都産業大学	10	開	24	株式会社ワコールホールディングス	5	開
5	京都市立唐橋小学校	6	開	25	株式会社 亀屋良長	5	わ
6	京都市立八条中学校	5	開	26	京セラ株式会社	20	開
7	社会福祉法人 ののな会 吉祥院こども園	5	わ	27	京都信用金庫 上鳥羽支店	5	開
8	龍谷大学	12	開	28	京都バス株式会社	5	コ
9	石山テクノ株式会社	5	中	29	パナソニックデザイン京都	5	開
10	岩本印刷株式会社	5	中	30	フリーポート京都	10	中
11	岡山工芸株式会社	5	わ	31	プレマ株式会社	12	コ
12	彼方此方屋(おちこちや)	6	コ	32	mui Lab株式会社	5	わ
13	株式会社ウエダ本社	4	わ	33	村田機械株式会社	5	開
14	株式会社カトープレジャーグループ ふふ京都	5	わ	34	ユアーズライフ合同会社	3	中
15	株式会社京都新聞社	5	わ	35	京都市南区役所	5	開
16	株式会社ケイヤマ商店	5	中	36	京都市南消防署	5	開
17	株式会社ケーエスアール	3	中	37	公益財団法人 京都市国際交流協会	7	開
18	香老舗 松栄堂	10	わ				
19	株式会社西川製作所	5	中				
20	株式会社はてな	7	開				

○地域協働コーディネーターの役割

地域協働コーディネーターとしての主たる役割は、開建高校ルミノーション科 1 年生 240 名の訪問先の確保であった。プログラム自体は、開建高校の前身となる塔南高校が平成 29 年から取り組んでいたため、連携先の協力もあり、訪問先は問題なく確保できた。しかし、前年度から次の3つの課題があり、これらの点の改善に向けて各種調整を行った。

<課題>

1. 「訪問すること」自体が目的になってしまい、プログラムの背景と目的が伝わっていない。(就職活動時の「企業説明会」や「インターンシップ」のような実施内容になっている)
2. 訪問先や担当者によって、プログラムについて背景と目的の解釈や受け止め方に差が生じる。
3. 付き添い教員がいることで、生徒が主体となって訪問するという意識が低下してしまう。

【実際に訪問して対面で実施イメージを共有する】

改めて訪問先へ未来デザインプログラムの背景と目的(本校のグランドデザイン、ミッション、スクールポリシー、総合的な探究の特徴、学校の特徴など)を説明し、こちらが目指すところ、そして担当者には「開建生にどんなことを伝えたいと思うか」の質問を投げ掛け、イメージの共有を図った。説明に際しては、企業・団体の想い(単なる企業・団体の概要ではなく、業界・業種の課題や考え、実現したい目標等)と担当者の想い(この仕事を選んだ理由やきっかけ、タイミング、現在の仕事のやりがい、うれしかったこと、悔しかったこと、目標等)を高校生に伝えてもらうようお願いした。この意図として、企業・団体概要を高校生が聞いても、自分の将来ややりたい仕事を考える際の現実感につながらず、イメージしづらいこと、「働く」ことについて、生活のためにお金を稼ぐ以外にも目的があること、自分の将来や未来に興味を持ち、未来をデザインする出発点としてほしいという思いがあった。

【ワークシートの共有】

実際に生徒に渡すワークシート①「事前学習」、ワークシート②「訪問時」、ワークシート③「事後学習」を訪問先の担当者と事前に渡し、プログラム自体の落とし所を明示することで、何をすべきかについて共有した。詳しくは次節で述べる。

【訪問先への生徒による事前連絡】

課題1と2にある訪問すること自体が目的化してしまうという課題は、学校側の担当者と訪問先担当者によるプログラムに対するイメージの齟齬だけが要因だけではない。生徒の主体性にも関わる問題である。そこで、以下のような工夫をした。

第一に、本年度は 37 の受け入れ先に対して、付き添い教員は 12 名である。つまり、25 の訪問については生徒のみで行う。したがって、訪問は「自分たちだけで行くものである」という点を強調した。他方、12 の訪問先については教員が同行する。この点については、訪問に際する教員の位置付けを変更した。すなわち、「引率教員」から「付き添

い教員」への変更である。これによって、教員が引率するのではなく、生徒が主人公となって訪問を行い、教員はついて行くだけという役割を明確化した。

第二に、生徒側から、受け入れ先に事前連絡をさせることで、当事者意識の醸成を図った。他方、高校生が先方に電話を入れることについては懸念もある。そこで、事前連絡シートを作成し、「伝えるべきこと」「尋ねるべきこと」を全てリスト化し、一般的な電話マナーに従って話せるよう原稿を作成させた。各受け入れ先担当者には、事前に連絡をし、失礼があるかもしれないが訪問時の意識を高める方策の一環としてご協力いただきたいとの旨を伝えた。

○事前・事後学習で用いるワークシートの工夫

これまでの訪問についての大きな課題は、「単なる訪問」となり、受け入れ先の概要説明に終始してしまうことであった。そこで、ワークシートを工夫することによって、訪問の目的を明確化した。ここでは「働く大人」に対する自己イメージについて、「予想外」「裏切り」をテーマとした構成を心掛けた。

ワークシート①(事前学習と予想)

1. 訪問先についてウェブサイト等を使って確認して、理念(ミッション・ビジョン・実現したい未来)や事業内容を調べましょう。その上で、この訪問先が、何をしているのかを簡単に説明してください。
2. 上を踏まえて、そこで働いている大人たちについて、以下3つの点について予想してください。
 - (1) ここで働いている人たちは〇〇のような経験をした人たちだろう。
 - (2) ここで働いている理由はきっと〇〇だろう。
 - (3) きっと〇〇な思いをもって働いているだろう。
 - (4) 多分〇〇が大変なんだろう。

ワークシート②(訪問直後の感想)

- (1) 訪問先で働いておられる方々は、どのような経験をした方で、どのような理由で働いており、どのような思いをもっておられましたか？
- (2) 訪問前に持っていた「大人」や「働く人」のイメージとどのようなズレがありましたか？
- (3) 今回の訪問を受けて、自分の未来のデザインはどのようになりましたか？具体的に説明してください。

ワークシート③(事後学習;予想外と裏切り)

- (1) ワークシート①[宿題]の(3)で書いていた訪問先に対するイメージのうち何が裏切られましたか？また、訪問前に見えていなかったことは何ですか？ワークシート②[宿題](2)と今日のディスカッションを踏まえて、書いてください。
- (2) 皆さんはこれまで、「職業名」や「年収」「安定」といった観点で「働く」を考えてきたかもしれませんが。今回出会った方々は、「働く」をどう捉えていましたか？訪問先で実際に聞いた話を踏まえて、あなたが出会った「働く人」にとっての「働く」の捉え方を書いてください。
- (3) あなたは自分の未来でどうありたいですか？

(4)「将来実際に何をしているかはわからないけど、でありたい」の空欄を埋めてください。

例えば、ワークシート①においては、訪問先の調べ学習をさせるだけでなく、調べ学習をするなかであえて偏見を持たせる工夫をした。②③においては、訪問前の思い込みと現実の乖離を明確にするような構成とした。ワークシート③の(4)が本プログラムの落とし所であり、「何をしているかはわからないがどのような自分でありたいか」を語らせることで、業種・職種にとらわれない自分の未来をデザインすることを目指した。

○訪問についての報告

事例①:岩本印刷株式会社様

会社の概要や社員構成、制作物、印刷工程についてお話を聞いたあと、社員の方々と対話的セッションを設けていただいた。

「就職したきっかけ」「社会に出るまでにやっておいたほうがよいこと」などを生徒側から質問し、社員の方々からリアルな語りを得ることができた。例えば、「就職したきっかけ」については、もともと印刷に強い関心があったりしたわけではないが、就職時の面接において、「一番自分を評価してもらっている気がした」「縁故」というお話があった。「社会に出るまでにやっておいたほうがよいこと」に対しては、「英語の勉強」「インキを練る時に化学の知識があればもっと役立てたかもしれない」「学生のように比較的時間がある時しかできないことをしておく、お客さんとの会話の中で、話のネタになる」というお話があった。

事例②:マコトプラスチック株式会社様

業務内容(プラスチック加工)について説明をいただいた後、従業員の方と直接対話をし、「入職のきっかけや動機」、また「どういう想いで働いているのか」についてお話をいただいた。

従業員の方々の語りから、元々プラスチック加工に長けた人が働いているわけではなく、「何か新しいことを始めたい」というきっかけでたまたま就職し、仕事を覚える内に楽しくなったという方が多かった。「働く想い」については、生徒があらかじめ想定していたように「お金を稼ぐ」ということを強く意識しているわけではなく、「自分たちの商品が社会の役に立つという喜び」というよりもむしろ、「モノをつくること自体への興味・関心」という語りをいただいた。

○ふりかえり(運営側)

【実施時期と訪問日】

実施時期と訪問日については適切であると考えられる。先方との打ち合わせや内容の調整に余裕がなかった点は課題だが、この点については9月実施体制の初年度であったことが主たる要因であり、次年度以降は改善が可能である。7月下旬に訪問先への生徒割り振りが完了するため、7月末の終業式以降の授業がない期間に余裕をもって先方とのやり取りが行える点はメリットである。

【引率について】

授業内実施であったため、授業担当者である1年担任 13 名のうち、12 名が引率した(1名は学校待機でトラブル対応)。37 の受け入れ先団体のうち、付き添いが12 名であったため、25 の団体については、生徒のみの訪問となった。付き添いがいないグループについて、当日のトラブルを懸念していたが、出発・到着・退出までのプロセスを逐一フォーム入力させることによって生徒の動向をリアルタイムで管理した。その結果、大きな遅刻・トラブル・事故もなく終えることができた。

○訪問先割振り

本プログラムの目的は、職種や業種ではなく、「働く大人」という抽象的なモデルへの接近によって働くことへの認識をアップデートすることである。ゆえに企業名や企業規模、業務内容等によって特定の訪問先を希望すること自体目的と齟齬をきたすこととなる。したがって、本年度はランダムな割振りとした。問題点としては、生徒間で訪問先までの交通費に差が生じることである。本校から徒歩2分で行ける場所もあれば、電車を乗り継いで往復 1,000 円を超える場所もある。交通費の多寡については来年度の課題である。

○実施スケジュールについてのふりかえり

事前学習から訪問までの間に文化祭が行われたため、訪問前の授業が1回分なくなり、生徒としては頭の切り替えが難しいスケジュールであった。しかし、コ・クリエイティブセンター(運営側)と第1学年(実施学年)の双方が早めからその前提でスケジュールを認識していたため、担任の教員をはじめ、ショートホームルーム等を用いて丁寧に指導をすることで、問題なく訪問日を迎えることができた。

3.4.研修旅行

○開建高校の研修旅行設計意図

開建高校の学校教育目標(グランドデザイン)では本校のミッションを「希望を持って未来を協創することを通して、生徒一人一人が新しい自分(自らの可能性や良さ)を見出し、自らの成長を実感できる学校」としており、キャッチフレーズとして「やってみたいをやってみる」「Learning by Doing」を掲げている。学校全体の教育活動を通して、生徒が自ら学び、自ら考え、行動していくことを目指している。

その開建高校での研修旅行がどうあるべきかと考えた際に、一般的な研修旅行、つまり、学校が行き先と行程をある程度決めており、事前の調べ学習でそこで何が出来るか、何があるのかを調べて問いを立て、現地へ行き研修の後、どのような経験をしたか、そしてその経験を通して何を感じたかなど事後のふりかえりを行うというある程度パッケージ化された研修旅行そのものを作り替えようと着手した。

よって、開建高校の研修旅行では、「やってみたいをやってみる」自ら学び、自ら考え、行動する仕掛けとして、一般的な研修旅行の流れと逆行することとした。まず生徒たちに示した問いが「せっかく京都を離れて遠くに行くなら、ど

んな経験をしてみたい？」そして、「せっかく京都を離れて遠くに行くなら、何を感じたい？」である。

生徒たちは自分がせっかく京都を離れて遠くに行くなら何を感じたいか、それは何をすることで感じられるのか、それを実行し感じるためにはどこに行くべきか、という流れで行き先の決定から、そこに行き何をするのか、生徒たち一人一人が自身の「やってみたいこと」の実現に向け研修旅行を作り上げていくことに変更した。これにより、研修旅行そのものが受身で消費するものではなく、能動的に生徒たちが行う活動に変わった。

また、開建高校が掲げる目標の一つであり、p4 で示したように「協創者」を育成するという観点と安全性の面とを共に考え、行き先は「海」コース「島」コース「都市」コース「村」コース「森」コース「山」コースの6カ所に設定した。そのコースも単に行き先を示し、生徒たちが具体的な都市名を挙げてここに行きたいと選ぶのではなく、感じたいことを感じに行くという点からこのキーワードを見て、自身の「やってみたい」ことが実現可能だと期待できるコースを選択するものとした。

図 30 研修旅行保護者説明会にて使用した資料



○研修旅行の概要

目的

- ①生徒が京都から飛び出し、「やってみたい」ことに基づいてフィールドワークを行うことで、未知の経験への果敢な挑戦力を涵養する。
- ②志が近い仲間とチームを形成し、自分の「やってみたい」と仲間の「やってみたい」とを高次に統合する経験をすることで、対話力を伸ばすと共に、互いを尊重し、社会的マナーを踏まえたチーム行動を通して、思いやる心を涵養する。
- ③普段生きる京都の文脈を離れ、出会ったことがない人々との対話・協働を経験することで協働力を伸ばすとともに、京都を捉える新たなパースペクティブを獲得し、未来をより良くすることへの貢献志を育む。

日程:令和6年3月10日(日)~3月13日(水) 3泊4日

行先:国内6か所

「海」コース 高知県高知市、岡山県倉敷市

「島」コース 広島県尾道市、香川県琴平市

「都市」コース 神奈川県横浜市、東京都墨田区

「村」コース 岐阜県大野郡白川村、石川県金沢市

「森」コース 長野県松山市、愛知県名古屋市

「山」コース 熊本県熊本市、福岡県福岡市

内容:研修旅行委員(教員)が企画した日(2日間)、生徒たちが感じたいことを感じるために設計した日(1日間)、研修旅行委員(生徒)が企画した日(1日間)

○研修旅行委員の設置とその役割について

生徒全員に開建高校の研修旅行について伝えた後に、研修旅行委員を生徒の中から募ったところ各クラスから22名の生徒が手を挙げ、研修旅行を作り上げていくこととなった。研修旅行委員とは教員からの連絡をクラスに伝えるという伝達役ではなく、研修旅行を作り上げていく委員であるという意識を持たせるために大きく2点工夫をした。

まず「研修旅行委員」の定義である。「研修旅行委員」とは研修旅行を作り上げていく中心となる人であると定義をして合意を得た。つまり、研修旅行委員とは生徒の代表を示すものでなく、教員をも含めた研修旅行を作り上げていく人のことであり、研修旅行に関しては、生徒と教員が縦の関係ではなく、ほぼ対等な横の関係であるということを示した。それに伴い教員を「引率教員」と称することをせず、「バディ教員」と呼称することで、引率は「研修旅行委員」が全員で行うものという意識をもった集団とした。

次に各コース4日間の内、1日を各コースの研修旅行委員に委ねる「未体験ゾーン」とした。これは各コースの「研修旅行委員」がそのコースの生徒たちが今までに体験したことがないことを体験する、感じる1日を設計するというものである。感じたいことを感じるを大きなテーマに据えている開建高校の研修旅行の中で、「全員が未体験を感じる」ということを目標に企画をした。その内容については以下の通りである。

「海」コース 牛窓カリヨンハウスにてイカダ作り体験

「島」コース 小豆島にてうどん打ち体験、オリーブ園自由散策

「都市」コース スカイツリー展望台

「村」コース ゆのくにの森にて工芸体験

「森」コース 名古屋城散策 ノリタケの森にて工芸体験

「山」コース 海の中道海浜公園自由散策、福岡ペイペイドームドームツアー

また、教員と立場を同じく引率を行うという責任のもと、研修旅行中の規則を研修旅行委員で作成した。この点については主に生徒たちが中心となって議論を重ねた。そもそも「～をしてはいけない」という校則のない開建高校の研修旅行の規則とはどうあるべきなのか。「～をしてはいけない」という規則を作ることが開建高校の研修旅行には適していないのではないかと考える生徒もいれば、引率をするにあたり、生徒たちの安全を確保し、一般の方々もいる中での宿泊を伴う研修なのだから、一定の規則が必要であろうという意見もあり、活発な議論を行った。

公共の意識や他者を考えることはもちろん、これをどうすればこの議論に参加していない生徒たちに伝えることができるのか、なぜ開建高校には詳細なルールとしての校則がないのか、なぜ多くの学校には校則があるのか、と言った所にまで考えが波及し、ほとんどの生徒が当事者意識をもって研修旅行並びに集団活動に向き合う姿を見せた。



図 31 研修旅行委員会の様子

○研修旅行に向けた活動の実施スケジュール

研修旅行の準備については、LHR および学校設定科目「ルミノベーションⅠ」の時間を活用した。

時期	研修旅行委員の動き	生徒の活動
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・6拠点の概要決定 ・研修旅行委員会立ち上げ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「やってみたいこと」の検討スタート 自身の「感じたいこと」を個人で考え、書き出す。 ・研修旅行委員の立候補
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員が「未体験ゾーン」を検討 ・チーミングを行う 「感じたいこと」「やってみたいこと」を実現するのにふさわしいチームを形成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「感じたいこと」「やってみたいこと」が似ている仲間を見つけチームを組む。 ・チームメンバーの「感じたいこと」「やってみたいこと」を実現するための行動を企画する
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員が「未体験ゾーン」企画を確定 ・各チームの志望理由書を検討し、行き先を決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各チームで拠点を最終確定する。「感じたいこと」が感じられる拠点を選び、そこでなければならない理由を明確にし、希望する拠点への志望理由書を書き上げ提出する。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員が「未体験ゾーン」の1日を計画し旅行会社と検討、確定する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「未体験ゾーン」(仮称)を踏まえ、各チームで詳細な旅行計画と、探究計画を練る
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員は旅行実施に当たり必要な準備を主導する 	<ul style="list-style-type: none"> ・各チームで詳細な旅行計画と、探究計画を練る
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員は旅行実施に当たり必要な準備を主導する ・しおりの作成を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各チームで詳細な旅行計画と、探究計画を練る
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員は旅行実施に当たり必要な準備を主導する ・研修旅行規則の検討を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立案した活動計画案を、旅行会社と折衝して実現可能性を検討し、必要な修正を行う
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修旅行委員は旅行実施に当たり必要な準備を 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動計画の調整、事前調査

	主導する	・旅行会社の方と対話し、旅程を確定させる。
2月	・直前準備、予約の確認など	・旅程を確定する。
3月	10日(日)～13日(水)旅行本番 15日(金)研修旅行事後報告会	

○生徒たちが感じたいことを感じるために設計する日について

「せっかく京都を離れて遠くに行くなら、どんな経験をしてみたい？何を感きたい？」という問いから始まる旅行を体験するのは生徒にとって初めてのことであり、戸惑う姿が見られた。しかし、「見えるようにしてみる」「さかのぼってみる」などのコアスキルを上手く活用しながら、自身の感じたいこと、やってみたいことを書きだしていた。その個人で黙々と取り組む時間では、自己との対話が行われ、自分がかつて好きだった物、興味が向いている活動を再認識した。また、家や学校、京都を離れて何がしたいのかと考える機会はこれまで少なく、この活動の後「そういえばこれ好きやったんよな」「研修旅行じゃなくてええから自分で旅行してくるわ。」など、自己理解が進み、「やってみよう」と挑戦に向かう姿が見られたのは大きな成果であろう。

ここでリストアップした「感じたいこと」「やってみたいこと」をおおまかに分類し、ある程度似た性質の「感じたいこと」「やってみたいこと」がある人が集まった部屋をつくりチーミングを行った。ここでは自己開示が必要であり、対話し、他者を尊重することが求められる。結果的に、感じたいことを感じる為に集まった、クラスも性別もばらばらなチームが多く形成されたことは、生徒がチーム形成に際して多様性を意識したことの証左であると受け止められ、自分の「やってみたい」と中間の「やってみたい」とを高次に統合する経験が、対話力の伸長および互いを尊重し、社会的マナーを踏まえたチーム行動を通して、思いやる心を涵養するという研修旅行の目的に近づくことに寄与したと思われる。そして、そのチームで1日を計画していく中で、自分一人で考えていた時には思いつかなかった「やってみたいこと」が、「感じたいこと」が似ている人と話すことで、刺激され、拡張されていく様子も見られた。

生徒は行き先を調べ、1日の予定を検討していく中で、3度の他者との対話を行った。まずはチームメイトとのやりとりである。次にその一日を実現させるため、より良い一日にするために計画表を旅行会社に送り、チェックをしていただいた旅行会社とのやりとりである。そして最後に、実際に旅行会社の方3名に来校いただき、直接対話を行った。それらと並行して、行き先の楽しみが勝るあまり、当初の「感じたいこと」から離れて行く班もあったため、バディ教員(研修旅行につきそう教員)とのやりとりは密に行った。それらの対話を通して、実現可能性を高め、よりチームが感じたいことを感じられるために1日を計画した。

学校として、この一日を支援するため、旅行会社と相談し、研修旅行費用の一部(一人当たり3,000円)を生徒たちに活動費として準備した。しかしながら、安全性の確保、集団行動という面から、早朝や夜間の活動には制限があった。また、自身の「やってみたい」ことと重なる人がおらず、部分的には計画できたが、完全には出来なかったという生徒もいたため、「やってみたい」を中心に据えた旅行としては今後の課題を残すところである。

○各コースの行程表

4日間のうち1日は上記の通り「未体験を感じる」研修旅行委員企画、1日は生徒たちが「感じたいこと」を中心に作ったチーム毎に計画し、教員や旅行会社の方と対話し作り上げた生徒企画、残り2日はそのコースのキーワードを感じられる、もしくは、その土地ならではのことを味わうバディ教員企画である。以下、簡潔に4日間を示す。

- 「海」コース 1日目(教員企画) 徳島県にて全体研修、船上から鳴門の渦潮を見学
2日目(生徒企画) 高知市周辺にて「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(教員企画) 倉敷美観地区、満寄洞にて全体研修、フィールドワーク
4日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
- 「島」コース 1日目(教員企画) 広島県呉市「大和ミュージアム・くじら館」にて全体研修
2日目(生徒企画) 尾道市周辺にて「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
4日目(教員企画) 淡路島洲本市にて全体研修、フィールドワーク
- 「都市」コース 1日目(教員企画) 鎌倉市にて全体研修、フィールドワーク
2日目(生徒企画) 横浜市周辺にて「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
4日目(教員企画) 国会議事堂、オリンピックミュージアムなどで全体研修
- 「村」コース 1日目(教員企画) 岐阜県郡上市にて全体研修、フィールドワーク
2日目(生徒企画) 白川村にて「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
4日目(教員企画) 石川県内灘町、ホリ牧場にて全体研修
- 「森」コース 1日目(教員企画) 松本市アルプス公園にて全体研修、フィールドワーク
2日目(生徒企画) 松本市周辺にて「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(教員企画) 浜松学芸高校と交流
4日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
- 「山」コース 1日目(教員企画) 太宰府天満宮にて全体研修、フィールドワーク
2日目(生徒企画) 「感じたいこと」を感じるためチーム毎にフィールドワーク
3日目(研修旅行委員企画) 上記の通り
4日目(教員企画) 福岡市「ABURAYAMAFUKUOKA」にて全体研修、フィールドワーク

3.5. TAの活用

OTAの役割と募集について

大学生によるティーチングアシスタント(以下 TA と表記)については、1年生と2年生の「総合的な探究の時間」で活用した。本事業の研究開発費の対象となっているのは1年生のTAのみであるが、令和6年度の事業においては2年生でのTAの活用も想定されるため、2年生のTAについても触れる。

TAは主に、教員の授業の進行補助や、生徒の探究活動の支援として生徒の言葉を引き出し、活動を整理し、自発的に活動を進めていく手助けを行う役割を担った。TAの存在により、教員だけでは手が足りなかった、個人やチームの状況に合わせた個別的な支援が可能になる。

これまでのTAの活用の経緯として、令和3年度は京都市の予算を活用して採用した一人に、2年生の授業を担当してもらっていた。当時2クラス同時に実施する2時間連続のコマを3つの曜日に分けて実施していた計6時間分に参加してもらい、生徒への声掛けや論文作成の補助業務にあたっていたというのが、本事業指定前の状況である。研究事業の指定を受けた令和4年度は、京都市の予算と本研究事業の予算を合わせて、前期22人、後期21人(前期との重複あり)、年間の累計では30人を採用し、開建高校の開校初年度となる今年度に向けたTAの運用や活用方法の開発を行った。昨年度は6月に応募を開始し、7月頃からTAの活動を開始するという流れであった。

昨年度の成果として、教員側にTAの活用のノウハウとTAの必要性を浸透させられた。生徒の学習活動においては、対話する相手やアドバイスをもらえる相手が増え、活動が停滞することが減り、より活発な活動や、より深まりのある思考が進むようになることが明らかになった。一方で、取組によってはTAの役割が一時的になくなる場面もあり、常時勤務してもらうのではなく、必要なタイミングを見極めること、採用においては、大学院生など、研究の経験があり探究が深まるような問いができる人材を確保することなどが課題となっていた。

TA活用のタイミングについては、今年度は、1年生は「京都探究」の取組に入り、2年生は「課題探究」が本格化する9月頃を開始時期として設定した。そこで大学生の後期時間割の決定時期を念頭に、8月から募集を開始した。初回の時点ではクラスごとの単位で授業が進行したため、各クラス2人での運用を想定し、6人のTAを1年生に充当する予定であったが、5人しか揃わなかった。そのため、「京都探究」の開始後もTAの募集は継続し、10月20日時点で、当初予定の最低人数は充当された。11月に入ると生徒が各自「考える素材」を選択し、「考える素材」ごとの活動に移行していくことを想定していたため、最低人員として、9つの「考える素材」があるため9人が最低人員となっていたが、11月時点で10人のTAが登録されており、問題なく進行的。その後12月まで募集を継続し、最終的に16人のTAの協力を得た。1・2年生のTAを合計すると23人のTAを最終的に確保でき、昨年度よりも多くのTAを確保することに成功したといえる。

OTAの実際の活動について

本校ではTAに授業記録を毎時間書いてもらい、TAと教員の情報共有の手段としている。ここでは研究事業の対象である1年生のTAの授業記録から、今年度のTAの活動の特徴とTAの活動時に困ったことを取り上げ、TAの活動の実態を描き出す。表35は授業記録から各活動日の代表的なものを抜粋したものである。表中のアルファベットは以下で取り上げている特徴的な記述であり、(ダッシュ)は同じアルファベットを振った別の記述と関連があ

ることを示す。なお、いずれかのアルファベットに必ずしも分類されるわけではなく、複合的なものが多いが、下記の説明に必要なもののみアルファベットが振られている。

表 32 授業記録の抜粋

日時	活動中のやり取りの記録	次回に向けたふりかえり
10/13	・「考える素材」のうち、発想の広がりそうなテーマ 3 つを選択するのにも時間のかかっている生徒がいた a テーマに対してキーワードが全く出ていない生徒には、ヒントを出しながら一緒に考えていた	d 手助けが必要そうな生徒に声をかけていたが、次回以降はもっと色々な生徒に声をかけていきたい
10/20	a 「考える素材」に引っ張られすぎて、それに沿った材料を引き出そうとしている生徒が多かったため、連想される言葉を中心に書いてもらおうと、言葉を引き出すことができた	e 生徒の考えていることが引き出せそうな発問をしたい ・自信がない時にあやふやな言い方をしてしまうことがあった
10/27	・外で基本的に生徒の後ろについていただけだった	・今回はあまり直接関わるができなかったため、次回は積極的に声をかけていきたい
11/10	d ワークシートに書いてある内容について質問したり、こういう問題がありそうということを伝えたりした	・生徒の発言量を増やせるようなアシストをしてあげたい
11/17	・具体的な調査の方針を立てきれないグループがいたので補助を行った b 生徒が悩んでいるところと一緒に考えた d やり方がわからなかったり、やる気のない生徒も、やり方のヒントをあげたり、少し進んだり、成長した際にしっかりほめてあげると自信につながり、やる気につながったように感じた	・黙々と進めている生徒に声をかけるべきかどうか迷ってしまった ・積極的にグループトークに入ってみる
11/24	a 標識に特色のある都道府県を他に調べてみて、もしあればそれが通常の標識とどう異なっているか、どんな要素を取り入れられそうか比較してみることを提案した b 問いが大きいグループと適切な大きさの問いにするにはどうしたら良いか話した a インタビュー内容やテーマの具体性が弱く、考える部分の助言を行った	・行き詰っているグループに対して、もっと実りのある声かけをできるようにしたい ・先生方がアドバイスしている様子を参考にして、次回取り組みたい
12/1	・質問をしていた生徒はあまりいなかった ・質問をするとしっかり答えてくれた	・先輩の良かったところなどを自分のものにしてほしいと思った。
12/15	・抽象的な案が多かった c 問いに対して、とりあえず調べるという体勢で目的がわ	・比較がメインになるのでどう質問すれば比較になるか、どう問いを立てたらよい

	からなくなっていた。その調べた情報からどうすれば問いの答えにつながるのかをアドバイスしたり、一緒に考えた b´ 計画や調査内容が詰め切れておらず、手が止まってしまったグループがいくつかあったので、一緒に何が足りないかを考えた	のかを一緒に考えてみる f 不足個所を誘導的に助言しすぎたように思った
12/20	a´´´´ インタビュー内容を悩んでいるグループに対して、「なぜインタビューするのか」「そもそもインタビューで得た情報は何につながるのか」を問い、対話を行った	e´ 積極的にツッコミを入れていく ・困っていきそうなグループの内容を自分も調べてみる
1/12	・問いに対して理由などの記述をすることができているグループは多く見受けられたが、それを踏まえた提案まで考え切れていないグループが多い印象だった e´´ 「どのようなことを伝えていきたいのか」ということを生徒自身に再認識してもらうためにその点に関する質問を多くした	・発表する内容の根拠となる部分などをフォローしたい
1/19	b´´´ 最後のまとめが難しく、停滞している班には、内容を一緒に整理して自分たちが一番伝えたいことは何なのか、改めて考えることができるような声かけを意識した。一緒に考えていく中で生徒自身が自ら答えを見出していた	e´´´´ 次回はりハーサルなので、ツッコミをたくさん入れるのと、どういう発表の仕方が良いか、パワポは見やすいかの確認をする
1/26	c´ 発表を見て、レイアウトやなぜその項目にしたのか考え直した ・何を発表したいのか伝わるように初めに伝える	・質疑応答の質問のない内容を予想する

活動のやり取りの記録からは a のように「ヒントを出す」ということが、TA の業務の中心であったことは、このような記述がその後も継続的に出ることからも確認できる。後半に向かうにつれて、より具体化する様子も確認できる。また b の「一緒に考える」は「ヒントを出す」の派生形と捉えられる。これは TA の他の記録やふりかえりと兼ね合わせて考えれば、TA にある程度答えが見えている時には「ヒントを出す」、TA にも答えがわからないときには「一緒に考える」という表現が使われているようである。ただ、実際には完全に分化されたものではなく、双方を交えてコーチングが行われたと考えるべきであり、したがってどちらにウェイトを置いたかによる表記上の差異程度の違いとして、派生形と捉えた。c は情報の整理や、生徒の思考の整理を手助けしたという記述である。生徒が考えを深めていこうとする際には、論点を整理するということが必要である。

この記述が後半に向けて多くなっていくのには二つの理由が考えられる。一つは、生徒の調査が進んだことで情報が増えてきたため、整理の必要が出てきた(情報が少ない間は整理の必要がない)という見方であり、もう一つは TA がよりの確かなアドバイスができるようになったという TA の成長としてとらえる見方である。生徒の変化が捉えられる記述というだけでなく、TA の成長を捉えられる記述である。TA の成長については、次回に向けたふりかえりの d のように、手助けが必要な生徒から、多様な生徒に声かけをしたいという意識については、b の「一緒に考える」や、d´

のワークシートから会話のきっかけを探すといった、きっかけを多く作るという解決策に結びつくことが多い。その中で d´´については、生徒のモチベーターとしての役割を見つけるという方向に進んだ記述と読み取れ、TA の一つの役割を TA 自身が見つけた例となっている。e は「ツッコミを入れたい」という意識があったところから、e´を含む 12/20 の活動では具体的なツッコミが入れられる状況への変化がみられる。さらに e´´や e´´´は着地点を想定しつつ、どのようなツッコミが必要かという俯瞰的な視野を持った支援へと変遷が見られる。こういった点に TA の成長が見られる。また f のように「誘導しすぎた」という反省が見られるのも興味深い。教員の教育実践も、このように「やりすぎた」「控えすぎた」という揺らぎの中で成長していくことが多い。そういった意味で TA に、こういった揺らぎを自覚させることが、より教員と足並みをそろえた、生徒にとって必要十分な支援のできる TA を育成していくうえで重要であると考えられる。

○来年度の取組に向けて

来年度に向けては上記の a～e の記述を参考に、TA に必要なコーチングの技術を、研修の形で体験的に TA 活動の開始前に伝えていくことが必要だと考えている。f については、このような観点を持ってもらうことが大切であり、実践の中で意識してもらいべきポイントとして伝えることで、TA の成長を促せると考えている。

今年度の成果を踏まえ、来年度については、1 年生は今年度と同様に京都探究からの活用としつつ、先立って TA 研修を夏休み期間に実施する。2 年生については、個人で自らの探究活動を設計していくという色合いが強くなり、個別の支援が必要になるため、年度当初より TA に協力してもらう計画である。その場合でもある程度の研修期間は必要であり、コーチング技術の体験や実際の指導に対するふりかえりなどを年度当初に行うことを考えている。

4. 研究開発(3)生徒が夢中になれる課外活動～より深く、より広く～

4.1. New HORIZON Day

○概要

New HORIZON Dayとは、生徒・教員が夢中になれる課外活動として位置づけられたもので、2か月に1回程度のペースで放課後を生徒・教員が「やってみたいをやってみる」時間として設定したものである。生徒・教員が新たな一歩を踏み出し、自分自身の興味関心を広げる機会と捉え、自由な発想で、挑戦してみたいことに取り組むことを目的とする。

○これまでの企画数と参加者数

第1回 5月18日(木)

	企画名	企画者	参加者数 (企画者含む)
	内容		
①	オンライン座談会 with 現役 JICA 協力隊員 JICA 協力隊員として、海外派遣されている人とオンライン対話を行った。	教員	6人
②	ドッジボール 新グラウンドを利用し、1年中心で企画・実施した。	生徒	42人
③	学校をスキャンして3Dで残そう iPhoneにアプリを入れ、校内のさまざまな所を3Dスキャンして残した。	教員	6人
④	GET GABEGE! GET HEART!! 学校外のごみ拾いを行い、拾った量で競う計画をした。	生徒	5人
⑤	手話歌から手話の扉を開こう 先生が生徒たちに手話を教え、1つの曲を手話で表現できるようになった。	教員	6人
⑥	鉄ちゃんと呼ばれたくなくて 外部から来られた講師の方に京都の鉄道についてのお話をいただいた。	外部	5人
	総企画数	6	総参加者数
			70人

第2回 6月21日(水)

	企画名	企画者	参加者数 (企画者含む)
	内容		
①	キューブ王に俺はなる!!!! ルービックキューブの方法を伝授した。少し変わった形のものも紹介していた。	生徒	4人
②	何を言ってるの?卓球をすればいいじゃない。 旧体育館を利用して、卓球を実施した。	生徒	13人
③	人狼ゲーム～人間を演じろ!～ カードを用いて人狼ゲームを実施した。	生徒	14人
④	映画鑑賞会 教室で映画の上映会を行った。	生徒	15人

⑤	塔南開建高校吉祥院校地をキャンパスに	生徒	14人
	吉祥院校地に感謝の気持ちを込めて、校舎の壁を装飾した。		
総企画数		5	総参加者数
			60人

第3回 10月17日(火)

	企画名	企画者	参加者数 (企画者含む)
	内容		
①	QUIZ SHOW クイズショー 答える速さを競う形のクイズ大会を実施した	生徒	7人
②	開建で歌にしてしまえば、どんなことでも許されると思っていた弾き語りライブ アコースティックギターを使った弾き語りライブ(軽音同好会の宣伝)。	生徒	15人
③	ソードダンス・ホライズン スポーツチャンバラを実施した。	教員	6人
④	いろいろなドッジをしよう! 王様ドッジなど工夫されたドッジボールを通して作戦を考えたり頭を使いながらプレー。	生徒	11人
⑤	Let's play Table Tennis!! 卓球を行った。	生徒	10人
⑥	初めての♡英語ディベート パラメンタリーディベートという英語ディベートの体験を通して、英語使用へのモチベーションを高めた。	教員	6人
⑦	未来協創会議から、新たな可能性 地域の方を招き、「未来の開建」について話し合った。	生徒	12人+24人 (外部)
⑧	世界史を語ろう 主に3年生の世界史研究受講者が対象で、世界史を語りホワイトボードにまとめた。	教員	4人
総企画数		8	総参加者数
			95人(うち外部24人)

第4回 12月15日(火)

	企画名	企画者	参加者数 (企画者含む)
	内容		
①	クリスマスコンサート 吹奏楽部と軽音同好会による合同クリスマスコンサート	生徒	56+観120
②	スマブラ e-sports 大会 任天堂のゲームソフトであるスマッシュブラザーズをプロジェクターに投影しながら、ルールを明確化して実施	生徒	17人
③	卓球～NEO～ 前回行った卓球を再度実施	教員	4人
④	図書館選書会 唐橋校地の図書館に配架する本の選定を行う	生徒	7人
総企画数		4	総参加者数
			204人(うち外部28人)

第5回 2月1日(木)

	企画名	企画者	参加者数 (企画者含む)	
	内容			
①	アソビ大全 カードゲーム「人狼」を実施	生徒	7人	
②	バドミントン大会 3年生の先生を中心に、バドミントン部やその他生徒と交流を図る	教員	25人	
③	弾き語りライブ 教室でミニライブの実施。軽音同好会や先生によるライブの実施。	生徒	10人	
④	未来協創会議 活動と展望報告会 この1年の未来協創会議の活動内容および今後の展望の報告会。	生徒	3人	
⑤	開建 IPPON グランプリ テレビ番組「IPPON グランプリ」の開建版の実施。	教員	35人	
⑥	国際交流 DAY 打ち合わせ会 3月下旬に実施される国際交流 DAY の打ち合わせを行う。	教員	7人	
⑦	追いかけて届けよう 教員による3年に向けた弾き語りライブの実施。	教員	10人	
	総企画数	7	総参加者数	97人

◆活動の様子



○現在の課題

昨年度より始めたプログラムで、昨年度は4回実施(うち一回は新型コロナウイルス感染症の校内での拡大により中止)、今年度は5回実施した。企画数は毎回5~8件で推移しており、各回の総参加者数は50~100人程度で推移している。目的にあるように、この日は“普段行わない活動に挑戦する日”として設定している。よって、昨年度はNew HORIZON Dayの日の部活動は原則禁止としていた。今年度は部活動とNew HORIZON Dayの両立を目標に実践してきたが、実際に両立することは難しく、環境整備の点(場所の割当)や人員の確保の点(企画者・参加者)でいえば、New HORIZON Dayの観点からすればやりづらい状況となった。

さらに11月実施の学校評価アンケートで、New HORIZON Dayについて言及するものが数件あり、いずれに

ついても部活動を停止し、New HORIZON Day を実施してほしいというものであった。以下は、実際の生徒の意見である。

今回のNHD(注 New HORIZON Day の略)で参加者が全体的に少なく申し込み締め切りが延長される事態がありました。その原因として NHD の日に部活動があることが 1 つあると思いました。NHD は生徒の「やってみたいをやる」をできるようにそして、チャレンジしてみるということができるよう学校が応援サポートすることというのが 1 つ開催された理由だと思います。だからこそ、部活動が NHD の日にあると「やりたいけど部活があってやれない」という生徒が出てきてしまうのは問題点だと思います。あと、今回のように参加者が減少していくことが続いていくと企画者も、「全然人が来ないしもう企画するのやめようかな」という人が出てきて企画者が減っていき誰もいなくなってしまうたら、NHD ができないということも今後あり得るのではないかと思います。ただ、大会前だから練習が必要だということもあると思います。なので、部活動と NHD 両方をよりよくしていくためにも再度 NHD の日に部活が行われていることに対して考えていただけたらと思います。

このように生徒たちは自分に起こった出来事に対しての不満の表明というわけではなく、New HORIZON Day という企画そのものをより良くし、自分たちの学校文化を作っていこうとしていることがわかる。こうした生徒の意見や動きを中心に、学校として New HORIZON Day の立ち位置を考えた際に必要な選択をしていく必要がある。

○目的に対しての達成状況

New HORIZON Day を「新たな一步を踏み出し、自分自身の興味関心を広げる機会」として捉えるには、各回の企画数の少なさや企画のジャンルの多様性の乏しさに物足りなさがある。また継続的な企画が少ない点にも課題がある。前者については、生徒の興味関心の幅を広げられていないことによると考えており、興味関心を広げる機会や、それを形にする機会を多く経験した開建高校の1期生が2年生になる来年度以降、増えていく可能性があると考えている。この機会が興味をもつ機会になっている一方で、この機会に「やってみたい」と思う興味・関心見つける機会を増やしていくという課題もあると考えている。

継続的な企画が少ない点については、生徒がより New HORIZON Day の機会を使い慣れてくる中で、より長期にわたる企画が現れると考えられる。これはまだ「生徒・教員が自由な発想で、挑戦してみたいことに取り組む」ということが十分にできていないということであり、機会が使いこなされるためにも、来年度はより多くの生徒に New HORIZON Day の機会を活用してもらうことが必要である。上記のような部活動との両立も含め、多くの生徒・教員が挑戦できる土壌を構築するためには、いったん全員が参加できる環境を整備する必要があると考える。来年度への課題の1つは、興味関心を広げる機会としての New HORIZON Day の確立と挑戦できる土壌づくりである。

○来年度の方針

この取組の目的と今年度の課題を踏まえ、来年度の方針を以下のとおりとする。「New HORIZON Day を新たな一步を踏み出し、自分自身の興味関心を広げる機会と捉え、生徒・教員が自由な発想で、挑戦してみたいことに取

り組む」ことのできる生徒や教職員を 1 人でも増やすために、年間 5 日程度を曜日の偏りなく配置するとともに、部活動を公式戦前以外に行わないなどの方針で実施したい。

4.2. 生徒の「やってみたいをやってみる」…未来協創会議

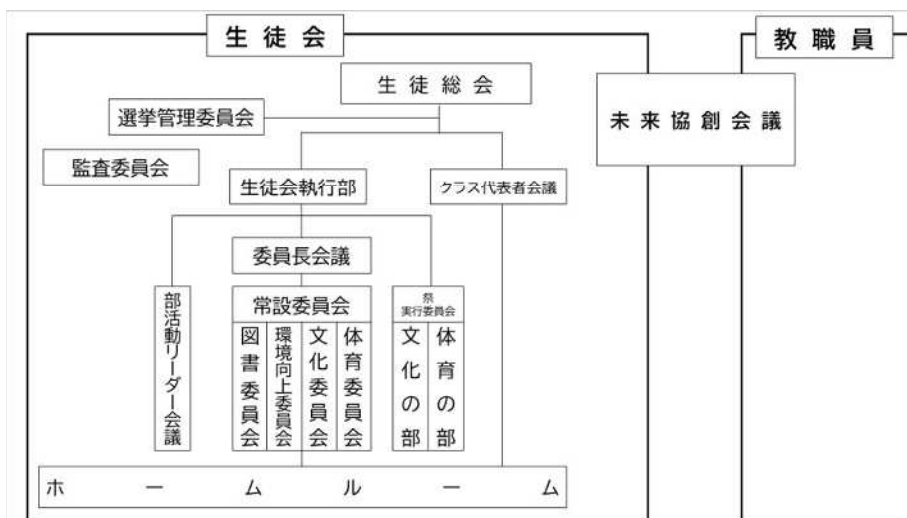
○「未来協創会議」とは

今年度新たに本校で設置した「未来協創会議」は、本校のスローガンである「やってみたいをやってみる」の精神のもと、学校や地域で生活する人々の状況をより良くすることを目指して、生徒と教職員が共に考え、より良い未来を協創すること、およびその文化を醸成し、さらなる問いを深めていくことを目的とした組織である。従来の生徒会とは別個に設立した本校教職員と生徒とを共に包含する立ち位置にある組織であり、その提案は生徒会総会や職員会議でも議題として提出することができるものとした。

図 33 未来協創会議の理念図(生徒作成)



図 34 未来協創会議の位置づけ



このような会議が設立された背景には、令和 4 年 12 月に改訂された生徒指導提要がある。生徒指導提要には以下のように示されている。

校則の見直しの過程に児童生徒自身が参画することは、校則の意義を理解し、自ら校則を守ろうとする意識の醸成につながります。また、校則を見直す際に児童生徒が主体的に参加し意見表明することは、学校のルールを無批判に受け入れるのではなく、自身その根拠や影響を考え、身近な課題を自ら解決するといった教育的意義を有するものとなります。(文部科学省『生徒指導提要』2022 年 12 月 P103 引用)

令和 4 年 12 月までに生徒指導提要が改訂されることを受け、本校の前身となる塔南高校において、「生徒心得を考える会」が立ち上げられた。生徒心得と校則とは同義であるため、以下校則と表記する。「生徒心得を考える会」は、校則について生徒が先生と一緒に考えることが目指された。現状の校則が成立した背景について考え、そもそも学校とはどういう場であるかを問い直すことで、校則を学校よりもさらに大きな枠組みから検討した。このような経緯があって、学校とそこでのルールについて考える機運が、開建高校開校時には一定存在していたといえる。

「未来協創会議」はこのような機運と必要性のもと、開建高校の開校に合わせて立ち上げられた。1 年生(開建)と 2 年生(塔南)それぞれが「より良い学校にする」ことを目指し、活動を進めた。

2 年生未来協創会議メンバーは、主に校則の中で時代にそぐわない点や、過剰な拘束となっている部分を変更することに焦点を当て、活動を進めた。生徒たちは校則が学校環境に与える影響がどのようなものか、という観点から多角的に深く考え、それに基づいて変更が必要と考えられる箇所を明確化した。このプロセスには教員も積極的に参加し、生徒と共に意見交換が行われた。

2 年未来協創会議が提案した改定案では、服装や装飾品に関する規定を見直す内容が含まれた。これについて、職員会議に生徒が参加して原案をプレゼンし、また PTA の会合にも参加して保護者目線の意見を受け止めるなど、積極的な対話を行った。この積極的な雰囲気は、より良い学校づくりに向けた一歩となった。最終的には、「より良い学校にする」という今年度の未来協創会議の目的を達成するために、1 月に開催された生徒総会で、生徒全体で学校への校則変更にかかわる要望書を提出するかどうかを問う議決を行った。この議決では要望書提出に賛成する意見が多数となった。これを受けて提出された要望書には、具体的な校則の変更案に加えて、自分たちで設定したルールをもとに学校生活を改善していくことについて生徒たちの真剣な意思が込められていた。

一方で、要望書提出をめぐる議決には、これまでの生徒総会で行われてきた議決と比して、多くの反対意見も提示された。議決を契機として、ルール形成者の自覚を持った生徒が増えたことで、多様な意見が提示される基盤が整ったことが、賛否のぶつかり合いを可能にしたと考えられる。ここで示された反対意見についても、次年度以降の未来協創会議において、教員と生徒と一緒に対話を続け、「より良い学校」に向けた歩みを進めていく材料となる。

上記の取組は 2 年未来協創会議が中心であり、塔南高校生が主な活動主体であった。しかし、前述の議決は開建高校 1 年生も参加して行われており、校則が違いながらも同じ校舎において生活する 2 つの高校の生徒が、共にルール変更を話題とした議論を行う機会となった。この経験を受けて、1 年未来協創会議の活動は一層推進されている。

2 年生の会議は校則の改定を目指したが、1 年未来協創会議は学校を学びやすい場にするに加え、地域の方々や学校とを緊密にすることも志向した活動を展開した。どのようなことが「地域の方々と交流する」ことにつながる

のかについて、その内容や方向性の検討から生徒・教員とのミーティングを重ねて検討した。その結果、生徒たちはまず学校に地域の方々を呼び、地域の方々との交流する糸口を探ったうえで、「地域の秋祭りのボランティア参加」を選んだ。

生徒たちは地域の方々と交流するにあたり、京都市南区で活躍する企業であり、塔南高校時代から連携を深めてきた岩本印刷株式会社様にご協力をいただき、多くの方々に挨拶することを想定し、「未来協創会議」を示すロゴデザインにもとづく名刺作成プロジェクトを行った。生徒にとって、まだ活動が本格化していない「未来協創会議」について想像力を働かせ、プロのデザイナーの方との話し合いを重ねて漠然とした考えを具体的なロゴにしていく過程は、生徒にとって「連携する」とはどういうことかを問う原体験となり、さらに実際に名刺という形で成果が見えるようになることで、達成感と自信を深めて、次の活動に向かう契機となった。

図 35 名刺交換を行う未来協創会議メンバーと、名刺デザイン(個人情報保護のため加工)



続いて、具体的な地域の方々との交流を行った。学校全体の「New HORIZON Day」(p73-76)において、開建高校カフェテリア(地域の方も利用できる学校の食堂)に地域の方々をお招きし、地域の方々が実際にどういったことを開建高校に期待し、どういったあり方が良いのかについて、共に考える機会とした。

図 36 地域の方と語る未来協創会議メンバー



この活動から生徒たちは、実際に学校を出て、さまざまな方々が集う場所に参加する重要性に気づいた。このことから、学校付近の公園で行われた、子ども食堂が一堂に会する「わくわくどきどき西寺公園秋祭り」において、岩本印刷様のワークショップのボランティアとして参加し、子どもたちと缶バッジづくりを行う経験をした。生徒はボランティアを楽しんだ一方で、開催後に何を、かかわった人々とどうやって関係を続けていくかが検討すべき課題であるこ

とを認識した。この気づきは、自分たちが卒業した後の未来協創会議を考えることにも通じることに、ふりかえりて言及したメンバーもいた。ここまでの学びを京都洛南ライオンズクラブが主催(高等学校コンソーシアム京都共催)する「第21回 Joint S&E Forum」において発表し、京都府内の学校や経済団体の方々と成果共有を行った。

一連の活動を通じて、生徒は外部の方々との活動が深まった一方で、肝心の校内の生徒や学校周辺に実際に暮らす方々に対して、未来協創会議の存在や活動が認知されていないという課題を自覚した。そして、未来協創会議で議論した「より良い未来」を学校において具体的な活動に落とし込む際に、学校行事を担う生徒会との連携を一層進めていく必要があるという結論を出した。

この結論に達した後、生徒会を動かす執行部の生徒との連携のあり方が早速議論された。議論を通して生徒からは、生徒会において連携先を探そうとしても、組織や取組の全体像が明瞭ではないこと、連携するにあたっての窓口等、不明瞭なことが多く、それは生徒会規約の改善点なのではないかという認識が出された。未来協創会議メンバーの生徒は生徒会執行部や各種委員会において役割を担った生徒がいたが、その活動の中でより幅広い活動に展開できる可能性を見いだしつつ、現状のルールでは不明瞭になっているところがあることへの気づきも見られた。これらの議論を経て、未来協創会議は生徒会と連携しつつ、現状の「生徒会会則」を根本から刷新する活動を開始している。次年度に生徒会組織を大きく改変することを目標として、組織体の設計、会則の条文づくりが進んでいる。

1、2年生の未来協創会議全体を通じて、生徒が実際に学校づくり・地域連携に取り組むことができると自覚し、具体的な結果まで努力を継続する姿勢が強化された。学校の、地域の主体として活躍する生徒たちが現れてきたことに成果がある。今後もこのような協働が続き、学校コミュニティ全体の発展に寄与していくことが期待される。

4.3. 指定校間の連携…「おにぎりプロジェクト」への参加

○目的

本校と同じく「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の指定校である浜松学芸高校(学校法人信愛学園)では、独自のプロジェクト型学習を行う探究創造科地域創造コースの取組として、地元企業と協働し、商品化を目指した地域おにぎりの開発・提案を行う「おにぎりプロジェクト」が展開されている。

地域「で」学ぶことを掲げ、高校生発のイノベーションを志向しながら多様な人々との協働に取り組む同校の実践は、開建高校が目指す「協創者」の育成と共鳴するところが多い。また、生徒にとっても違う環境で生きる同年代の生徒から相互に刺激を受けることは好ましいことであると考えた。このことから、開建高校でも「おにぎりプロジェクト」を展開し、選抜チームが浜松学芸高校において行われるコンペティションに参加することを、連携事業として行うこととした。

本校における目的を、次のように設定した。

京都の食材を使ったおにぎりの創作、実食を通して、京都の魅力の再発見・発信につなげるとともに、食べてもらう対象の設定、リサーチ、創作までの段取り等、モノを作り上げる上で必要なことを、実践を通して学び、今後のさまざまな企画立案・実施につなげる。
--

○プロジェクトの概要

プロジェクトは次のスケジュールで展開された。

2023年9月21日 (木)	生徒対象「おにぎりプロジェクト」説明会
10月3日(火) ～13日(金)	生徒はチームを編成し、エントリーを開始
10月16日(月)	出場者対象の説明会で「試食会」を案内
10月27日(金)	試食会 1か月後のコンペティションに向けた示唆を得る
11月25日(土)	開建高校おにぎりコンペティション
12月16日(土)	コンペティションで選出されたチームが、浜松学芸高校との学校交流に参加する

募集に際しては、以下の条件を示したうえで、チームを作ってエントリーしたチームが参加できるものとした

【条件】

- 1チームの人数は4～6名とする。
- おにぎりの原価は80～100円とする。※その内米の原価は50円とする。
- おにぎりの具材は京都(範囲は問わない)のものを使用すること。
- おにぎりの重量は120g～125gとする。
- 学校の施設を使うことができるのは試食と審査の二回のみ。それ以外の練習は各チームで行うこと。
- 食材費については実費負担となります。

※ただし、試食会とコンペティションで使用する食材費については必要ありません。

○プロジェクトの様子

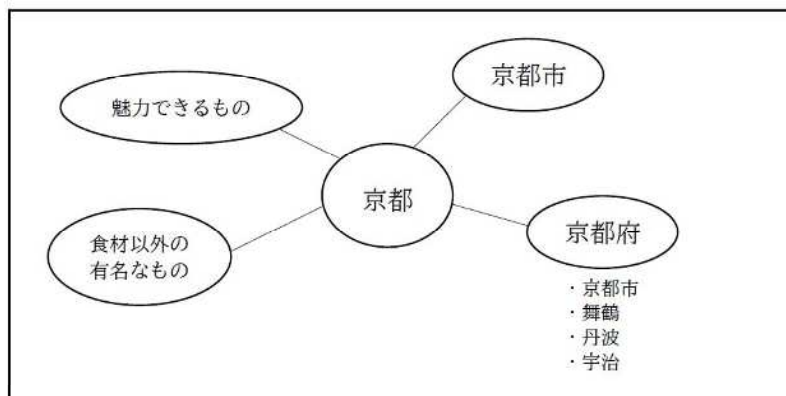
募集の結果、9チーム(39名)の生徒が参加した。彼らは10月27日に開催される「試食会」に向けてオリジナルのおにぎりを考えた。「試食会」では、9チームがそれぞれコンセプトをプレゼンテーションし、作成したおにぎりをゲストに提供し、実食ののちに講評を受け取った。

「試食会」には本校管理職に加え、三彩食品有限会社 代表取締役の谷本祐輝様、本校学校運営協議会メンバーでもある有限会社遠山の小田浩子様にご来校いただき、流通と生産性の観点からの指摘をいただいた。また、他チームの生徒との相互の質問・意見交流も活発に行われた。



この試食会において、どのチームも「京都らしい」という表現を用いていたが、それぞれが指す「京都らしい」のイメージがあいまいで説得力に欠けることが指摘された。このことから、改めて「京都」を問い直すワークショップが、10月31日に開催された。今回のおにぎり提案に関係する「京都」が指す内容について、生徒どうしてマッピングし、さらに「京都の食材」についても改めて見直した。このことから「京都」や「京都らしい食材」の背後には非常に多岐にわたる背景が存在することについて実感をもって気づく生徒が増えた。

図 37 ワークショップの途中で生徒がまとめたマッピング



学校の中で調べるだけでは「京都らしい」に届かないと判断したチームは、食材として使用する予定だった伏見とうがらしの生産者である、京都府宇治市の佐原農園様に連絡をとった。その結果、11月11日(土)に生徒が佐原農園様を訪ねることができ、伏見とうがらしの由来、特徴、おにぎりに合う調理法などについての教を拝受しただけでなく、ご厚意により試作用の伏見とうがらしを頂戴した。



また、コンペティションが近づくと、生徒たちは随時試作品を友人や教職員に実食してもらうようになった。料理経験が豊富な生徒や、米の生産経験がある教員を見つけて協力を得る様子もみられた。

11月25日(土)に、開建高校おにぎりプロジェクトコンペティション(通称:おにコン)を実施した。9チームはいず

れもおにぎりの内容だけでなく、プレゼンテーションの内容についても 10 月の試食会より大きく洗練した状態でこの日に臨んだ。

図 38 試作の様子



図 39 発表・審査の様子



審査の結果、九条ネギを活かしたおにぎりを考案したチーム「こめつぶ」(1年1組の有志生徒)の「どんと参上 激うま九条ねぎにぎり」が開建高校代表として選ばれた。選ばれたチーム「こめつぶ」は、12月16日(土)に浜松学芸高校が実施する「おにぎりプロジェクト報告会」(浜松学芸高校地域創造コースの1年生9チームのプレゼン)に、「東西おにぎり決戦」を掲げて参入した。



本校生徒は惜しくも最優秀として選ばれることはできなかった。しかし、浜松市の地元企業様にご好評をいただき、1社からレシピを採用したいという申し出をいただくことができた。

浜松学芸高校の生徒のプレゼンに触れたことで、地域の見方・考え方に多様性があることを肌で感じたとともにこの連携が地域や文化の活性化を促進させ、新たな価値を生み出すという効果を上げることが出来た。

また、浜松学芸高校のプレゼンを見ることで、自分たちのプレゼン能力や分析の方法、見せ方・伝え方等の強みや弱みを再確認することにつながった。また、同じ高校生という立場で終了後もたくさん話をする中で、プロジェクトとは関係ないが、校則がある学校とない学校という話題で話をし、改めて自分たちの身なり含めさまざまなことについて自分たちに委ねられていることが分かり、1つ1つの行動に責任を持つ必要があると感じた。



図 40 代表作品の pop

4. 4. 龍谷大学との連携事業

○本取組の経緯と概要

本校は、数年前より龍谷大学との連携事業を進めてきた。本校がキャリア教育の一環として行っている「未来デザインプログラム」において、高等教育に携わることについてのお話や大学生との交流の機会をいただいたり、防災についての知識と思考を深め、実際に具体的な活動を提案する、本校の「防災ボランティアリーダー」に対する助言をいただいたりと、さまざまな支援をいただきながら教育活動を推進してきた。

ここまでの経緯を踏まえ、令和5年11月、龍谷大学と連携協定を締結し、一層の教育活動の充実を図ることとした。連携協力の主な内容は以下の通りである。

- ①開建高校の生徒に向けた探究型プログラムの企画・運営
- ②授業(総合的な探究の時間・探究型科目)における学習支援
- ③部活動における指導・助言
- ④開建高校の生徒に向けた地域交流イベントの企画・運営
- ⑤その他双方の交流・発展に関して必要と認める事項

○活動の具体

- ①龍谷大学入澤崇学長記念講演

対象:開建高校1年生 240名

日時:令和5年11月15日

場所:開建高校